

「底が突き抜けた」時代の歩き方 521

「中村うさぎ」という生き方の暴走の魅力

「1958年、福岡県生まれ。同志社大学卒業後、コピーライターを経て作家デビュー。ブランド物の買い物依存症、美容整形、ホスト熱など、自分を題材にした露悪的なエッセイで人気を博す。近著に『女という病』（新潮社）がある」という略歴がある中村うさぎさんは、正真正銘「バカ女」である。あまりにも稀に見る「バカ女」ぶりにこちらはあてられてしまい、どうしても無視できなくなってしまうのだ。「バカの壁」ではなく「バカの威力」である。バカは考えることができないからバカである筈なのに、この「バカの威力」は考える力をもった「バカ」なのだ。バカが考えるようになったら賢くなるのではないか。そう教わってきたし、そう思い込んできた。だが違うのである。新種の「バカ」かもしれない。「バカ」が一生懸命考えて賢くならず、より一層大きな「バカ」へと体当たりで突っ込んでいく。「バカ」が必死に考えて「大バカ」になっていくというのは、愉快であり、壮快ではないか。

「暴走する私は、どこに向かう」（『婦人公論』05. 11. 7）という文章で、《何かに依存するたびに私は、新しく出現した「自分」に、身の毛がよだつ。まるで膿が出るように、私の魂の傷口から、目を背けたくなるほど醜い自分がドロリと出てくるのだ》と本の帯のような文句を連ねているが、要するに、何かに依存するたびに自分の中から《まるで膿がでるように》、「バカ」（な自分）がドロリと出てきて、《身の毛がよだつ》と言っているのだ。おぞましいのだが、次々と引き出されてくる「バカ」に蓋をして、素知らぬ顔で生きていこうとはしないのである。井戸のように深い自分の「バカ」を覗き込んで、吐き気を催しながら覗き込む自虐を繰り返しているのだ。一体、なにがそれほど駆り立てているのだろう。勇敢そうにみえるけれども、けっしてそうではない。ヤケクソなのである。自分の井戸の中から得体の知れない「バカ」が、よお、と突き出されてくるバカ面に腹が立って仕方がないのだ。その腹立ちは憎悪にも似ているだろう。

《30歳を過ぎる頃まで、私は、自分という人間をある程度把握しているつもりでいたし、自分が自分の手綱を振り切って暴走するなんて、思いもよらなかった。ところが、33歳にして私は突然「買い物依存症」などという病に罹り、破滅的な浪費が止まらなくなって、愕然としたのである。それはまさに、私の知らない「私」であった。こんなに狂った「私」が自分の中にいたなんて、約30年間、全然気づかなかったのだ。》

誰でも皆、自分の中に知らない「自分」を抱え込んでいる。というより、私というものは知らない「私」によって満たされている。歳月を経ることで私たちは少しずつ《私の知らない「私」》に出会い、私の知っている「私」の領域を拡大していくが、《私の知

らない「私」》に出会う過程こそが成長なのである。成長とはただ単に歳月を経ることではない。《私の知らない「私」》に出会うことによって、私たちは否応なしに成長していくのである。そして少しずつ死んでいくのだ。《私の知らない「私」》が私の中にいなくなったとき、私は完成し、そして死ぬ。しかし、人は自分のことは自分が一番よく知っていると思い込みながら、生きている。確かに自分が一番よく知っている自分と付き合い、慣れ親しんでいることは間違いないが、逆の言いかたをすれば、自分が知っている自分のなかでしか生きていないのである。つまり、自分が知っている自分に充足しようとしているのだ。

《私の知らない「私」》に出会うためには、当然自分が知っている自分の外へと踏み出さなくてはならない。通常人は自分の外へとあまり踏み出そうとはしない。なぜなら、そうすることによって自分の知っている自分が壊れる恐怖を感じるからである。あるいは、従来の自分を失うかもしれないからだ。だから誰もそんな冒険を冒そうとはしない。

《私の知らない「私」》に出会おうとするには、したがって私の意思においてではなく、私を超えるなにかに突き動かされなくてはならない。その意味では恋愛体験にも似ているかもしれない。彼女が「高額のブランド物を買って漁る」という嗜癖に取り憑かれたとき、彼女はもちろん、自分が自分に取り憑かれたのである。《すでに家にはブランド物の服が山のように積み重なっているというのに、しかも、それを買うために一千万円近い前借りや借金をしているというのに、懲りもせずシャネルやエルメスのブティックに行っては、とても支払えないほどの金額をクレジットカードで切ってしまう。》

自分の知っている自分が壊れつつあるのだ。問題はその状態に耐えられるかどうかである。壊れていく渦中の自分を見つめることができるかどうかだ。

《その瞬間、頭の中は真っ白になり、「もう終わりだ。これでとうとう破産する」という恐怖とともに、「えーい、どうにでもなれ」というヤケクソの開放感が、激しい快感の奔流となって、どっと脳内に押し寄せるのだ。破滅の恐怖と背中合わせになった背徳の快感……それが「依存症」の特徴である。この独特の、陶然とした麻痺の感覚が、「やめたくても、^はやめられない」という強迫的な行為を何度も何度も繰り返させるのだ。》

ドツボに嵌まること自体はそれほど珍しいことでない。ドツボに嵌まったとき、人はどうするのか。よく知られるパターンの一つは、向こう側へ行ってしまうことである。すなわち、破滅に向かってまっしぐら。もう一つのパターンは、こちら側へ引き返してくることである。破滅か生還かのいずれかだが、どちらにしても従来の自分の外へと流出した自分が顧みられることはない。破滅に突き進む自分はそのことで精一杯であるし、こちら側へ引き返すことができた自分はもう二度と自分の知っている自分の外へ飛び出さないことを固く誓いながら、自分の知らない自分を封印しようとするだけだ。前者は自分の知っている自分の外へ飛び出したままであるし、後者は自分の知っている自分の中へ引き返してくるだけで、どちらも《私の知らない「私」》に出会っているわけではない。そんな自分について考えることがないままである。彼女が特異なのは、破滅にま

で突っ走った《この「謎の自分」の正体》を解き明かすために、《来る日も来る日も、「自分」について考え》ることを止めなかったことである。

《私は、何が欲しいのだろう。ブランド物でないことは確かだ。その証拠に、どんなに素敵な服やバッグを買っても大切にしないし、一度も身につけないで部屋に放り出すことさえある。何よりも、買っても買っても満足しないのは、それが「私の本当に欲しい物」ではないからじゃないか。それでは、私が欲しいのは何だ。

それは「自分」なのだ、と、ある時、気づいた。私は自分という人間をよく知っているつもりだったけど、それは「自分のように見える抜け殻」に過ぎなかった。そう、自分の中身はじつは空っぽで、私はその空虚な自分を何とか実体化させるために、ブランド物でゴテゴテと着飾らせていたのだ。まるで、魂のない裸のマネキンにシャネルやエルメスを着せ掛けて、遠目にはいかにも人間らしく見せかけるように。ブランド物は、私にとって「成功」のシンボルであった。私はそのマネキンを、「成功した自分」に見せかけたかったのである。他人に対してはもちろん、私自身に対しても。》

自分が欲しいのはブランド物ではなく、ブランド物を持った「自分」であり、ブランド物を持つことができるほどに「成功した自分」にほかならなかった。だが、ブランド物はブランド物であり、ブランド物を身に着けたからといって、「成功した自分」になるわけではない。その証拠に、《家にはブランド物の服が山のように積み重なっている》だけで、本人はあまり身に着けることがない。身に着けるためではなく、ブランド物を買うこと自体が目的と化していたのだ。虚栄であることに気づきながら、虚栄街道をバク進し、疲れ果てた挙句、自分が「成功したマネキン」にほかならないことをつくづく直視するようになったのである。そう、無意味さに気づいたのだ。

「買い物依存症」などに陥って手痛い思いなどしなくも、そんなことはわかりきったことではないかと思うし、彼女自身も初めから盲目だったわけではあるまい。自分にとってはどうしてもよかったにちがいないブランド物に手を伸ばしたのは、自分の知らない自分であった。ブランド物に意味はなく、自分の知らない自分がブランド物を掴み取ったこと自体におそらく意味があったのだ。つまり、ブランド物を掴み取った自分の知らない自分に興味を持ったのであり、それは別にブランド物でなくてもよかったのである。自分の手から離れて野放しになったもう一人の自分が、自由奔放にブランド物を手にしていることに快感を覚えてしまったのだ。もう一人の自分の正体がわかって《私はようやく落ち着きを取り戻し、本当の自分と仲直りができた……ような気がしたのだが、そうは問屋が卸さなかった》。彼女はそう続ける。

中身のない自分をブランド物で着飾らせていただけであることがわかったなら、自分の中身の空っぽを埋めるにはどうすればよいのかを考えればよかった。ブランド物では満たされないことはよくわかった。では一体、空っぽの自分を埋めるのは何なのか。彼女の自己分析から読めるのは、「高額ブランド物を買って漁る」嗜癖から抜け出すために「自分」について必死に考えるようになったのではなく、そんな嗜癖に取り憑かれた

「自分」について考えるようになったことが、「買い物依存症」から抜け出させたのである。関心は明らかに「自分」に向かっているから、ブランド物から決別した空っぽの自分をどうするかが残されたままだった。したがって、空っぽの自分と向き合うことになったとしても、《本当の自分と仲直りができ》る筈もなかった。

もちろん、「本当の自分」は空っぽでない自分であったから、《本当の自分と仲直りができ》るためにも、《私の知らない「私」》に出会う旅は続けられねばならなかった。次にやってきたのはホスト狂いだった。《自分の指名ホストのランキングアップを楽しむ遊び》で、《私が金を遣えば遣うほど、彼の売り上げが上がり、店の中でのランクが上がっていく》ことに熱中したのである。

《そう、またもや「成功した自分」という幽霊が、私に取り憑いたのだ。今度はブランド物をシンボルとする「成功して高収入を得た自分」ではなく、ホストの順位に仮託した「成功してナンバーワンという評価を受ける自分」だった。その頃の私は、自分がこの文筆業界でナンバーワンになることを、すっかり諦めていた。そもそもナンバーワンなど夢見る時点で図々しいのだが、負けず嫌いで野卑な上昇志向ばかり強い私は、自分が一番になれないという現実が悔しくて悔しくて仕方なかったのである。で、金さえ払えば簡単にナンバーワンになれるホストの世界で、自分の果たせなかった夢を見ようとしたのだった。》

高級ブランド物漁りに金の限りがあるように、ホスト狂いにも金の限りがあった。《結局、彼をナンバーワンにできないまま》、ホスト遊びでもナンバーワンになれなかった。この時点でホスト遊びも終わる筈だったが、ホストの「色恋営業」に更に嵌まってしまったのだ。若いホストの告白に《ホストという職業に対する警戒心を解いた途端、私はズッポリと恋に落ちてしまった》のである。

《ホストのランクアップを楽しむゲーム感覚の「前期」から、惚れた男に金を貢ぐ色狂いの「後期」への突入。前期に比べて、後期は遥かに恍惚も苦悩も強大だった。若い男に愛されているかもしれない、という恍惚と、彼の愛なんぞ嘘っぱちで自分は騙されているのかもしれない、という苦悩。愛されているという幻想に縋り付くために、さらに金を遣う羽目になった。苦しくて苦しくてやめたかったけれども、ちょっとした彼の言葉や仕草が嬉しくて気持ちよくて、やめられなくなった。要するに、「ホスト後期」は「恋愛依存」だったのである。》

ブランド物依存症やホスト遊びが「成功した自分」の幻想であったなら、「恋愛依存」は「愛される自分」の幻想だった。前者と後者の違いは物と人との違いにあった。ホスト遊びもまたホストをブランド物としてみるなら、前者は物に対する彼女の一方的な働きかけであった。自分が自分を騙しているかもしれないとしても、物から彼女が騙されるということはありません。だが後者の場合、ホストから彼女への働きかけがメインで、彼女からホストへの働きかけはその上に乗っかっていた。前者が所有による「成功した自分」幻想であったなら、後者は被所有による「愛される自分」幻想であった。

要するに、後者は前者の裏返しにほかならなかった。「成功した自分」にことごとく失敗するなら、一敗地に塗れた女に残されている贅沢は「愛される自分」以外にありえなかった。

《15歳も年下のイケメンに愛されることで、私は自分の「女としての価値」を確かめたかったのだと思う。気がつけば、もはや40代半ば。女としての価値は暴落し、恋愛の土俵から押し出されつつあった。40歳になった頃、「このまま枯れちゃってもいいかな」なんてチラッと思ったこともあったけど、こうして降って湧いたような恋愛に身をゆだねた途端、じつは自分が全然諦めていなかったことを思い知ったのだ。

これもまた、私にとって、「見知らぬ自分」であった、私の中に、こんなにみっともなく男に溺れる自分が存在したとは……と、薄ら寒くなった。買い物が止まらない「自分」も空恐ろしかったが、今度の「自分」はもっとおぞましかった。》

ホストをナンバーワンにできなかった彼女は、自分に対する悔しさと同時に相手のホストに対する負い目も感じていたかもしれない。ホスト遊びもブランド物漁りと本質的には変わらなかったが、だが遊びが終わったとき、ホストはブランド物から人のほうへ抜け出てこようとする。もし彼女がホストにいくらかでも負い目を感じたとすれば、そこがホストの狙い所であった。ゲームに敗れた女は打ちひしがれており、自らの傷心を癒されることをひそかに求めているだろうからだ。女客を商売とするホストにそんな女心がわからない筈がなかった。断言してもよいが、ホスト遊びが終わったとき、必ずホスト相手の些か真剣な恋愛ゲームがその時点で始まっているといってよい。彼女の場合も、ホスト遊びを経験するどの女も嵌まるごく一般的な事例であったと考えられる。おそらくホスト遊びとは、その「色恋営業」まで含んでナンボの世界であったにちがいない。だから、彼女が次のように言うとき、彼女の中には「見知らぬ自分」と同様に「見知らぬ他人」も詰まっているのがみえてくる。

《ホストへの恋愛依存は、結局、彼の嘘が白日の下に晒され、取り繕いようもなくすべてが暴かれたことで終わった。この時、私をもっと傷つけたのは、自分が騙されていたという事実ではなく、私と同じように騙されて苦しんでいる女たちが何人もいた、という事実であった。何人もの女を地獄に突き落として平気な顔をしているような、そんな卑劣で恥知らずな男だったのか、と、愕然とした。私の中の彼は、嘘もうまくつけないほど無邪気な、幼子のように無垢な青年だったのに。本当に、私には男を見る目がないらしい。》

ブランド物狂いについて彼女は、ブランド物を持つことができるほどに《「成功した自分」に見せかけたかった》と自己分析していたが、次のホスト狂いに嵌まっていくことを考えれば、その「成功した自分」には経済的な意味合いだけではなく、ブランド物で着飾った女性としての価値にも「成功した自分」的な意味合いも当然含まれていたにちがいない。ブランド物買いに挫折した彼女が次のホスト買いに向かうとき、そこには《ホストの順位に仮託した「成功してナンバーワンという評価を受ける自分」》幻想だ

けでなく、自分が入れ込んだホストをナンバーワンに就かせる女性としての価値も含まれていた筈だ。この女性としての価値にも「成功した自分」幻想がずっと底流していたが故に、ホストの手練手管に待っていたかのようにスリと嵌まってしまったのである。ホスト狂いはブランド物狂いの挫折に対するリベンジでもあったにちがいない。ブランド物狂いに懲りていなかったわけではない。だが、そのこと以上に、悔しさのほうがあるかに上回ったのだ。

悔しさはホスト狂いの挫折でもますます募っていった。だから、『地に堕ちた女の価値』を取り戻そうと足掻く^{あが}ように、「美容整形」に嵌まっていくことになったのだ。

《注射でシワを消し、顔の皮を引っ張り上げる手術でタルミをなくし、胸にシリコンを入れて小娘のように膨らませ、私は「若くて美しい自分」を人工的に手に入れようと躍起になった。ただ、ブランド買いやホストへの恋愛と違って、自分の欲しがっているものが明確であったため、以前よりずっと冷静だった。私は若さと美しさを手に入れて自分の「女としての価値」を底上げしたいんだわ、と、常に理解していた。だから、買い物依存やホスト依存の時のようなヒリヒリと焼け付くような飢餓感も薄く、自分でコントロールできないほど暴走することもなく、三カ月に一度のシワ消し注射すらうっかり忘れそうになるほど平静であった。美容整形は、依存症に発展しなかったのである。マイケル・ジャクソンみたいに整形し過ぎて鼻が崩壊するようなことにもならなかった。今回、私の傷口から出てきた「思いがけない自分」は、「自分の顔を手放してホッとしている自分」であった。》

おそらく整形前の彼女は美人ではなかった。顔で勝負することができない女は、身に着ける物で勝負しようとする。ブランド物とは女にとっては（男にとっても）、「女としての価値」の格付けを際立たせるものにほかならなかった。だが所詮は、ブランド物は顔で勝負できない女にとっての借り物にすぎなかった。ブランド物がなければ通用しなかったからだ。ブランド物買いが続かなかったのはお金の所為であり、自分の気持ちのなかに尚もブランド物買いを続けたい衝動があったなら、自分の身体そのものをブランド物扱いにして「美容整形」するほうが手っ取り早い、という考えが生じたとしても別に不思議ではない。もちろん、ブランド物狂いから「美容整形」への途が一足飛びに感じられるなら、その間に彼女の場合であれば、ホスト狂いの階梯を差し挟めば無理なく理解できるだろう。

ホストの嘘に騙されたことを知ったとき、彼女は《本当に、私には男を見る目がないらしい》と述懐しているが、問題は彼女の「男を見る目」を曇らせているものはなにか、であった筈だ。もし彼女に「男を見る目」が備わっていたなら、ブランド物買いもホスト買いも起こりえなかった。つまり、虚栄に取り憑かれることはありえなかった。「男を見る目」の的確さは彼女を虚栄の大海に放り出すようなことはしなかった筈だ。「女としての価値」のレベルアップをたえず図ろうとする彼女はそのなかで、「男を見る目」を養うことを放棄していたと思われる。《15歳も年下のイケメンに愛されることで、

私は自分の「女としての価値」を確かめたかった》ということは、確かめたくなるほどに「女としての価値」を自分は備えているかもしれないと思っているということである。要するに、世の中にはうまい話が転がっていることもあると、有頂天になってしまったのだ。

「男を見る目」がなかったのではなく、自分を見る目がなかったのである。15歳も年上の、顔に自信があるわけでもないフツの女が、イケメンのホストに愛を告白されること自体が尋常ではなかった。しかし、もともと彼女の人生の歩みそのものが尋常ではありえなかったから、そんなことを言ってみても仕方がない。案の定、《自分の「女としての価値」を確かめたかった》彼女は、自分の「女としての価値」のなさ確かめることになってしまったが、諦めない女の行き着く先の一つが、「美容整形」であったのだ。《「若くて美しい自分」を人工的に手に入れようと躍起になった》としても、そこには「美容整形」によって変身した自分がより一層男によって「愛される自分」になっていく気配は微塵も感じられず、たたかいとしての「美容整形」のモードに移行している気分が濃厚に漂っている。

もちろん、《若さと美しさを手に入れて自分の「女としての価値」を底上げしたい》と理解していたように、彼女にとっての「美容整形」は当初はどの女性もそう考えるという意味でありきたりな理解であった。ブランド物そのものを自分の容姿に刻み込んでしまえばよかったし、ホストを含む男たちが、女を見ただ目で評価していくなら、その評価に合わせて《「若くて美しい自分」を人工的に手に入れ》るために「美容整形」すればよかったのだ。けっして大それたものではなかった。《買い物依存やホスト依存の時のようなヒリヒリと焼け付くような飢餓感も薄く、自分でコントロールできないほど暴走することもなく、三カ月に一度のシワ消し注射すらうっかり忘れそうになるほど平静であった。美容整形は、依存症に発展しなかった》と言うとき、「美容整形」をしながら、そのことについて十分考える時間もあつたし、なによりも思考を断ち切るほどの情念の嵐は起こらなかったということである。

自分にとって「美容整形」とはなんであるのか。顔面改造によって「自分の顔を手放してホッとしている自分」に出会った、ということなのだ。《私は美人になりたいのかと思っていたが、じつはそうでもなく、むしろ「美人とかブスとか、批評されたくない」だけのようだ。整形以前は、「ブス」と言われればもちろん傷ついたが、「お綺麗ですね」などというお世辞を言われても、やはり居心地の悪い想いをしていた。今は「お綺麗ですね」と言われたら「整形なんですよ」と答え、相手が気まずそうな顔で黙ってしまうのを楽しんでいる。「整形です」と言われたら、人は、私の顔の批評する気が失せるのだ。それはたぶん、「この顔は私の顔ではありません」と言われたも同然で、本人の属性でないものを褒めても貶しても無意味であると感じるのだろう。》

ブランド物買いもホスト買いも、そして「美容整形」もすべて「女としての価値」の底上げにはならなかったが、では、その「女としての価値」を決めるのは一体、誰なの

か。少なくとも女である自分ではない。周囲の男たち（のまなざし）なのだ。「美容整形」にまで行きつくことによって、彼女は自分の「女としての価値」を決定しているのは自分ではなく、男であることにより思い至ったのである。《買い物依存やホスト依存の時のようなヒリヒリと焼け付くような飢餓感》に何度も呼吸困難に陥りながら、七転八倒してきたのは男のまなざしに包囲されて身動きできなくなっている女としての彼女自身であった。「美容整形」も本当は自分がしたいからではなく、男のまなざしに囚われた自分が欲求しているだけのことであった。そのことに気づいたとき、彼女は「美容整形」をそれを口にすることで打ち消しながら、男の顔面批評から解放される術を手にしたのである。整形された容貌を批評したければ、さあ、どうぞ、であったのだ。

とは言うものの、自分の顔は手放しても、「女としての価値の確認」の欲求は手放したわけではない。恋愛相手に「二カ月で見事にフラれ」てからは、《恋は諦めてセックスによる「女の価値の確認」だけがテーマになった。男が私に欲情し、金を払ってでもセックスしたいと思ってくれたら、私にはまだ「女としての価値」がある、ということになるではないか。そうよ、手っ取り早く、金で自分の価値を確認しましょう。愛されてるのか、愛されてないのか、なんて答えの出ない問題で、悩むのは、もうウンザリだわ。「愛」なんて数値化できないんだから、自分の価値がどれほどのものかなんて、結局は明確に確認できないのよ。でも「セックス」は金で測定できる。風俗産業という世界に身を置けば》ということで、今年の8月、《三日だけ、デリヘルで働》き、11人の男たちを相手に、《擬似セックス（本番は違法なので）をした。一時間1万5千円…それが、私の「性的価値」の値段であった。私の懐に入ったのはその半額だが、金を稼ぐのが目的ではなかったもので、それで充分》であり、三日のデリヘルで「気が済んだ」。

《私は「性的価値の確認」行為には依存しなかった。おそらく、美容整形の時と同様、自分が何を確認したがつているのか、自覚していたからであろう。もしも自覚しておらず、ヒリヒリと身を焦がす自己確認の飢餓感にだけ突き動かされていたら、あの東電OLのように最後は渋谷のホテル街に立ち、我が身を滅ぼしていたかもしれない。

私はずっと、「自分探し」と「自己確認」の欲求に身を任せて生きてきた。それは、とりもなおさず、「自分」という謎の解明であったのだと、今では思う。私は、自分を探し当てたかったのではない。自分を確かめたかったワケでもない。自分の正体を知りたかっただけなのだ。何かに依存するたびに出現する「見知らぬ自分」を怯えながらも受け容れて、空白だらけだった「自分」というジグソーパズルを完成させたかったのだ。

あと、何ピースで、私の「自分像」は完成するのだろう。今は、それが恐ろしくもなく、ただただ楽しみなのである。》

そう結ぶが、自分という人間がどのような人間であるかを知りたいという欲求に突き動かされて、自分を制御することなく、野放しにしていってことが記述されていた。よくぞ破滅しなかったもんだと驚き入るが、破滅に至らなかった理由については、《自分が何を確認したがつているのか、自覚していたからであろう》と書く。《もしも自覚し

ておらず、ヒリヒリと身を焦がす自己確認の飢餓感にだけ突き動かされていたら、あの東電0Lのように最後は渋谷のホテル街に立ち、我が身を滅ぼしていたかもしれない》と付け加える。では彼女には「自覚」できて、東電0Lにはどうして「自覚」できなかったのだろう。彼女の文章を読んでいて気づくのは、どこへ突っ走っていくかわからない「自分」が一体なにを欲しているのか、《来る日も来る日も、「自分」について考えた》ことである。その、考えることを持続させていたのが、「書く」ことであったにちがいない。

考えに考え、書き続けることで、無謀な「自分」に耐え、「自分」との対話を繰り返してきたのが彼女の文章から伝わってくる。「見知らぬ自分」と和解するプロセスをつくり上げてきたことが、「見知らぬ自分」に自分が破滅の淵へと追い詰められていくことを救っていたのだと思われる。別の言い方をすれば、東電0Lのように《ヒリヒリと身を焦がす自己確認の飢餓感》に囚われないところへ導いたのが、絶えざる「見知らぬ自分」との対話であったのだ。《「自分探し」と「自己確認」の欲求に身を任せ》たところから始まったとしても、際限のない「自分探し」や「自己確認」の欲求の迷路に踏み入りそうで踏み入らなかったのは、「見知らぬ自分」との出会いにまだ見ぬ恋人との出会いを重ね合わせて、ワクワクする喜びを抑えきれなかったからではなかったか。東電0L事件にも触れているように、地獄を垣間見てきた彼女には、同じ地獄で我が身を滅ぼしていく女たちの哀しさが自分のことのように押し迫ってくるのだろう。

この東電0L事件については、石井政之との対話集『自分の顔が許せない!』で次のように、我が身の如く語っている。

——女の人は、仕事の上で自分のやるべきことに突き進んじゃうと、「女としてやるべきこと」がおろそかになってしまうのは、当然じゃないですか。一日は24時間しかないんだから。それでハッと気がついたら、「だってブスじゃん」とか「だってババアじゃん」とか言われるようになってっちゃう。ほんと、悔しいわけ。でも、やっぱり自分が女としての賞味期限が切れるみたいなことに、焦りを抱いてしまうのも事実。東電0L殺害事件(…)の彼女は、その典型的な例だと思うんですよね。

——30代後半ですね。39歳。だから、売春婦としても、賞味期限すれすれですよ。

——彼女は、自分の女の価値を金に換算する人じゃないですか。あれ、苦しかったと思うんですよね、数値化できないと。あの人は、すごく優秀な人だったと思うし、勉強もできたんだと思うのね。慶応大学時代、トップクラスだったというし。自分の数値がいつも明確にあったんですよ。偏差値であったり、点数であったり。

でも、女の価値って、数字じゃないじゃないですか。何人の男がくどきにきたってことをカウントしている人は少ないし。フィーリングじゃないですか。でも、彼女は曖昧なもので自分の女性的価値を確認できないので、しかも経済学部出身だし、経済行為に置き換えちゃうんです。5000円で売れた、2万円で売れた、と。たとえば「今日

は3万円まで」というのが彼女のノルマだったんですよ。

——スポーツ選手じゃあるまいしね。今日は何時間走る、みたいな数値化のしかたをするとところがね。

ノンフィクションライターの朝倉喬司さん(…)が言っていたのですが、彼女、すごく几帳面な人だったんじゃないか、って。たとえば、今日は3万円と決めるじゃないですか。でも、その日の上がりは3万円きっちり、なんてことはないんですよ。2万8000円だったりするわけ。そしたら、その2000円のマイナスが許せないわけですよ。それで、もう一人客をとるでしょう。すると3万円を超えちゃうわけ、微妙に。そうしたら、次に4万円が自分の達成額になってしまう。その「まだまだ」みたいなところが、彼女のかわいそうなところ。終わりがいいから。

渋谷での売春が終わった後、帰りにコンビニとか居酒屋だかに寄って、その日の自分の稼ぎを全部万札に両替するんです。そうすると、必ず余りや欠落がはっきりするじゃないですか。その欠落を、明日埋めようと思うわけですよ。そんなことをしていたら、人間、きりがいい。でも、その「きりのなさ」というのが、私はやっぱり他人事じゃない。

石井——相手によって「3000円でもいいよ」というときもあった、というのがありましたね。別に、お金に困っているわけじゃないけれども、達成しなくちゃという感じだったのでしょね。

——そうなんです。つまり、自分に何か欠損があることが許せないから、ものすごく頑張って、勉強をした。それで、一流大学に入り、一流会社に入って、総合職で、企画部経済調査室副長にまで昇進するわけです。でもあるとき、「私は、女としてどうなのか」という命題を突きつけられたのではないかと思うんです。いつから売春を始めたのかよく知らないけれど、やはり30歳を過ぎたぐらいからだと思う。回りからの、「そうは言っちゃってさ、男っ気もなく、あんなパサパサとした女、どうよ」みたいな声がやっぱり耳に入ってくるし、今まで「頑張って勉強をして」と言っていた母親が、「そろそろいい人、いないの？」みたいなことを言ったりすると、「いい人って言ったって、そんな余裕ないわよ」となりますよ。そんなことを急に言ったりするからね、母親も。悪気はないんだけど、今までの彼女の人生を全部否定するようなことを言って、違うスタンダードを目の前に突きつけられると、あの人は優等生だから、それをクリアしないといけないと思うんですよ。「それは無理だから」とは言えない。

——あの人、「孤独なランナー」なんですよ。中学のときに、体育は苦手なくせに、頑張ってマラソン大会で一位になって。そうしたら次の年にもまた一位じゃなきゃいけないと思って、眠る時間を削って、ジョギングしたりしてるんですよ。なんでそんなに頑張るのか、わからない。「マラソンはビリでいいよ」って、誰か言ってやれよって思うんだけど。

——そう。「頑張り屋さん」とかって、ほめられちゃうんです。

「そんなことをしていたら、人間、きりが無い。でも、その『きりのなさ』というのが、私はやっぱり他人事じゃない」と言うように、彼女は自分自身のこととして事件の女性について語っている。「もう一人の自分」の愚かしさとしてどうしても見えてしまうのだ。彼女は強調していないが、会社で男と対等（以上）に張り合っている女性にどうしても「私は、女としてどうなのか」という命題が突きつけられてこざるをえなくなるほどに、東電OL事件は男社会の中での女性のジェンダーとしての苦しさを浮き彫りにしている。「私は、男としてどうなのか」という命題を男が突きつけられることはありえないからだ。それは社会のなかで女性が「だってブスじゃん」とか「だってババアじゃん」と切り捨てられるのに、男は「だってブ男じゃん」とか「だってジジイじゃん」と切り捨てられることがないのと同様である。

「女としての賞味期限」が云々されるのに、「男としての賞味期限」が云々されることはない。ずっと頑張って生きてきた東電OLは一流大学に一流会社と順調に望みを叶え、管理職にまで就いた。男であればそれで何の問題もなかったが、女にとってそれは女を捨ててきたことの「ご褒美」にほかならなかった。自分がなんのために頑張ってきたのか、女としての自分を捨てることを頑張ってきたのか、そのことに気づいたとき、彼女は自分が欠落してきたものの大きさに愕然としたにちがいない。「頑張り屋さん」の彼女は自分がこれまで犠牲にしてきた女性としての領域でも頑張ることを決意したのである。売春が悪徳であるとか不道徳であることを彼女が感じない筈がなかったが、自分の女としての価値を手取り早く金に換算するためには、売春しか術がなかった。それほど切迫していたのだ。それも組織に頼らず、最もリスクな街娼に身を置いて、昼間のエリート職業生活を維持するためにも、夜間に「女としての価値」を売る自らの肉体を吹きっ晒しの断崖に立たせつづけたのである。

だが、いうまでもなく売春や援交においては女としての性が商品価値たりうるかどうかだけが問題とされるだけであって、「女としての価値」がそこで確認されることは到底ありえなかった。むしろ売春や援交では「女としての価値」はますます凌辱されるばかりであった。中村うさぎの対談の中での言葉でいえば、「自分の身体に対する愛があるんですよ。見知らぬ男の性のはけ口にしたくないんですよ、じぶんのあそこを。（…）あえてきつい言い方をすれば、『排泄所』じゃないですか。『排泄所』になる覚悟はやっぱりつかない」ということにかかわる問題であった。要するに、女としての自分の価値を確認する場所として彼女が売春を始めたとき、最もふさわしくない対極的な場所を選んでしまったのだ。つまり、彼女には自分の「女としての価値」を確認するために、自分がなにをしようとしつつあるのがわかっていなかったし、なにを欲しているのかもわからなかった。だから引き返すこともできなかった。ビジネスではけっしてありえなかった筈なのに、売春をノルマとして続けざるをえなくなったことによって、彼女は我が身を滅ぼしてしまったのだ。

2006年1月7日記

